

哲学を日常へ レポート

この課題では、この授業で身につけた知識や技能を用いて、教室の外で哲学的探究を行う。

学期中に二本のレポートを作成する。それぞれ、授業内の主要テーマの一つに対応する。

各レポートでは、そのテーマに関連した複数の哲学的問いが提示される。その中から、一つだけを選ばなければならない。

これらの問いは、哲学的に重要であると同時に、人々が日常生活の中で実際に關心を持っている問題とも結びついている。

たとえば、コスモポリタニズムや移民を扱う授業であれば、次のような問いが考えられる。

- 私たちの道徳的義務は国境を越えて及ぶのか。
- 国家への所属は道徳的な重要性を持つのか。
- 国家が移民を制限することは、道徳的に正当化されるのか。
- 個人には、国境を越えて移動し定住する道徳的権利があるのか。

この課題では、授業とは無関係の相手——たとえば友人、家族、あるいは見知らぬ人——と、その問いについて議論することになる。

その後、この経験について振り返る 1500 語程度のレポートを提出する。

レポートには、以下の内容を含めること。

- 討論内容の（簡潔な）要約（相手の応答も含む）。

- その討論に対する「反省的分析」（下記参照）。

レポートの中心は、単なる出来事の報告ではなく、討論過程そのものに対する反省的分析であるべきである。

反省と分析

ここで求められている反省と分析は、「その討論が良かったか悪かったか」を評価することではない。重要なのは、その討論が哲学的討論としてどのように機能していたのかを理解することである。

内容そのものから一步距離を取り、討論の過程自体を検討する必要がある。

- 前提と枠組み：あなたと対話相手は、どのような前提を共有していたのか。どのような暗黙の前提が、互いの議論を支えていたのか。そうした共有された前提は、どのような場面で討論を助け、どのような場面で議論をそれ以上深めることを妨げていたのか。
- 分岐点：あなたたちは、どのような点で対立していたのか。ただ列挙するのではなく、なぜその分岐が解消しにくかったのかを分析すること。互いに噛み合わないまま話していたのか。同じ言葉を異なる意味で使っていたのか。あるいは、両立しない前提から議論していたのか。
- 論証戦略：どのような具体的なやり方が、討論を前に進める助けになったのか。たとえば、具体例を出したとき、明確化を求めたとき、隠れた前提を指摘したとき、あるいは原理を境界事例によって検討したとき、それはどのような効果を持っていたのか。逆に、うまく機能しなかった方法は何であり、なぜ失敗したと考えるのか。
- 行き詰まった地点：討論は、具体的にどの地点で停滞したのか。議論がそれ以上進まなくなった瞬間を特定できるか。その行き詰まりを生んでいたのは、概念

的混乱だったのか、用語の不一致だったのか、感情的な抵抗だったのか、それとも共有された枠組みの欠如だったのか。さらに、その行き詰まりを乗り越えるためには、何が役立った可能性があるのかも考えること。

- 前哲学的コミットメント：背景的な信念、価値観、宗教的立場、文化的前提、あるいは性格的傾向は、討論の進み方にどのような影響を与えていたのか。それらは明示的に語られていたのか、それとも表面下で作用していたのか。また、それらは特定の議論の方向性を妨げたり、ある種の論証を受け入れにくくしたりしていなかったか。

- 意外だったことと気づき：自分が予想していなかったことは何だったのか。また、このテーマについてだけではなく、「哲学的討論そのもの」について何を学んだのか。

二回目のレポートでは、以下を必ず含めること。

- 第一回の討論から何を学んだのかを、明確に説明すること。
- その経験を踏まえて、自分のやり方をどのように調整したのかを説明すること。
- それらの調整が成功していたかどうか、またその理由を分析すること。
- もし第三回の討論を行うとしたら、何を違った形で行うかを振り返ること。

これは討論であって、インタビューではない

ここで、特にはっきりさせておきたいのは次の点である。

- あらかじめ質問リストを作り、それを順番に消化していくべきではない。

- 相手の考えは、実際にあなた自身の思考へ影響を与え、ときにはそれを変える可能性を持っているべきである。
- 相手の立場に積極的に異論を投げかけると同時に、自分自身の立場も擁護すること。
- 会話は自然に展開され、双方がその方向性に関わるものであるべきである。
- 二人で本当に何かを理解しようとしている必要がある。

この課題は、データ収集ではなく、協働的な問題探究として考えること。あなたは相手の意見を「記録」しているのではなく、その相手と共に、一つの哲学的問いを探究しているのである。

討論中：もし次のようなことをしているなら、やめること

- 質問をし、答えを聞き、そのまま次の質問へ進んでいる → それは討論ではなく、インタビューになっている。相手の発言に対して応答し、異論を述べ、なぜ自分が同意しないのかを説明し、必要であれば反例を提示すること。
- 相手に同意したことで、そのまま領いて終わってしまう → 同意は討論の終点ではなく、むしろより深い探究の出発点である。共有された立場そのものを、一緒に検討してみる。「しかし、もし……だったら？」あるいは「批判者ならこう言うのではないか？」と問いかけてみるとよい。
- 「相手を尊重するため」に異論を避けてしまう → 哲学において、最も深い敬意とは、相手の考えを「議論に値するもの」として真剣に扱うことである。なぜ自分は相手が間違っていると思うのかを率直に伝え、同時に、自分の考えに対しても同じように反論してもらうこと。

- 「なぜそう考えるのか？」を問わないまま主張を受け流してしまう → 理由を理解しないまま表面的な同意や不同意に留まっていたら、議論は深まらない。むしろ、さらに掘り下げる必要がある。「なぜそう考えるのか？」「何がそう言わせているのか？」と問い続け、最終的に、その考えを支えている根本的な前提や理由にたどり着くまで掘り下げること。
- 中立のままだったり、自分の立場を取ろうとしなかったりする → 自分自身の考えに本気でコミットしていなければ、本当の哲学的討論にはならない。自分が実際に正しいと思っていることを主張し、それを擁護しつつ、自分が間違っている可能性にも開かれていること。
- 混乱したり行き詰まったりすると、すぐに先へ進もうとしてしまう → 興味深い哲学は、むしろ混乱や行き詰まりの中で生まれることが多い。そこで立ち止まり、何が問題を難しくしているのかを特定し、概念を明確にしたり、別の例を試したりしてみる。
- 授業内容を完全に忘れてしまう → あなたはすでに何週間もかけて、この討論に直接関係する概念・区別・論証を学んできている。相手が何かを述べたときには、「これは授業で扱ったどの概念と関係しているだろうか？」と考えること。授業で学んだ概念的道具を用いて、混乱を明確化したり、議論を前に進めたりしてほしい。ただし、授業内容を単なる権威として持ち出してはいけない。それを使って、討論の中で実際に何が起きているのかを理解することが重要である。

執筆中：もし次のようなことをしているなら、やめること

- 双方が何を言ったかを 300 語以上かけて要約してしまう → それは分析ではなく、議事録や文字起こしになってしまう。まずは討論の流れを簡潔に整理し、その後で、「なぜそのような展開になったのか」を分析することに大部分の分量を使うべきである。

- 結論だけを報告し、過程を検討しない → 「最終的に私たちは X という結論に至った」というだけでは、その討論について何も分からない。むしろ、「私たちが X の地点で行き詰まったのは……だからだった」「転換点になったのは……の瞬間だった」「Y という例を使った戦略がうまく機能した／しなかったのは……からだった」といった形で、討論過程そのものを分析する必要がある。
- 「議論はうまくいった」「面白かった」とだけ書いてしまう → 漠然とした評価は分析ではない。重要なのは、どのような具体的なやり方が討論を前に進めたのか、どこで正確に停滞したのか、そして互いに気づかないまま共有していた前提は何だったのかを考えることである。
- 「私たちはどこで行き詰まり、なぜそこで止まったのか？」に答えないままレポートを終えてしまう → これは必須の問いである。これに対して明確な答えを示せないのであれば、その討論を本当の意味で分析したことにはならない。
- 1200 語未満で終わってしまう → この分量に達していない場合、多くの場合、分析が十分に行われていない。レポートの中心は要約ではなく、討論過程に対する反省的分析であるべきである。

反省的分析とは何か

反省的分析とは、討論内容そのものから一步距離を取り、その討論がどのように機能していたのかを検討することである。

すでに課題説明の中で、その分析を助けるための問いは提示されている。以下では、「良い分析」がどのようなものかを例として示す。

悪い例：「議論はうまく進み、私たちは多くのことを学び、生産的な討論だった。」

良い例：「私たちが X をめぐって対立したところで、討論は停滞した。振り返ってみると、その理由は、同じ言葉を互いに異なる意味で使っていたことにあると思う。私は X₁ の意味で使っていたが、彼女は X₂ の意味で使っていた。このことに気づいた後（討論開始からおよそ二十分ほど経った頃）、私は具体例を用いて明確化を試みた。その結果、私たちは実際には実質的な部分で対立していたわけではないと理解できた。この経験から、討論が行き詰まる原因は、実質的対立よりも、むしろ用語上の不一致であることが多いのだと学んだ。」

悪い例：「友人はこの問題について考えを変えた。」

良い例：「私が反例 C を提示した後、友人は立場 A から立場 B へ移行した。これが効果を持ったのは、C が抽象的だったからではなく、具体的で、自分自身の経験と結びつけて理解できるものだったからだと思う。興味深かったのは、最初に私が行った権威への訴え（授業で学んだ内容を引用すること）はほとんど相手を動かさなかった一方で、個人的な例のほうは実際に影響を与えたという点である。この経験から、哲学的訓練を受けていない人にとっては、経験に基づく推論のほうが、理論的論証よりも説得力を持つことがあるのではないかと考えるようになった。たとえ形式的な論証としては後者のほうが強力だったとしても。」

悪い例：「私たちは異なる前哲学的コミットメントを持っていて、それが討論に影響を与えていた。」

良い例：「討論の途中で、友人が論証 X に抵抗していた理由は、強力な反論を持っていたからではなく、X を受け入れることが自分の宗教的信念と緊張関係を生んでしまうからなのだ、と私は気づいた。最初そのことに気づけなかったのは、相手が自分の異論を哲学的な言葉遣いで表現していたからである。しかし、それ

を理解した後、私は X を相手のより広い世界観と両立可能な形で説明できないかを模索し始めた。その結果、相手はより開かれた形で議論に関わるようになった。この経験を通して私は、人がある論証に抵抗を示す背景には、明示されていない前提やコミットメントが存在していることが多いのだと学んだ。」

提出前に、次の点を自分自身に問い直してみることを。

- 私が行ったのは、本当の討論であり、単なるインタビューではなかったか。
- 私は相手の考えに異論を投げかけたか。
- 私は自分自身の立場を擁護したか。
- 要約は 300 語以内に収まっているか。
- 私は、討論がどこで、なぜ行き詰まったのかを説明できているか。
- 私は、具体的な論証上のやり方や戦略を分析しているか。
- レポートは少なくとも 1200 語あるか。
- (第二回レポートの場合) 第一回のレポートから学んだことを、明確に論じているか。

もしこれらの問いのいずれかに「いいえ」と答えることになったなら、提出前にレポートを修正すること。

AI について

この課題では、いかなる形での AI 使用も認めない（文法修正も含む）。

この課題の目的そのものは、人と人との直接的な対話を行い、それについて自分自身で直接振り返ることにある。

AI を使用した場合は、授業の AI 使用ポリシーに基づき、重大な措置の対象となる。